

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第151号

イザヤ 65:1

平成20年4月25日

最初に、神が天と地を創造した。地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が氷の上を動いていた。神は仰せられた。「光があれ。」…「大空が水の真ただ中であれ。水と水との間に区別があれ。」…「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現れよ。」…「地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがって、地の上に芽ばえさせよ。」…「光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」…「水には生き物が群がれ。鳥が地の上、天の大空を飛べ。」…「地が、種類にしたがって、生き物を生ぜよ。家畜や、はうもの、野の獣を、種類にしたがって。」…「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」神は人をご自身のかたちとして創造された…男と女に彼らを創造された…こうして、天と地とそのすべての万象が完成された…神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木を生えさせた…善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ。」神である主は仰せられた…野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった…蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」…それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った…神である主は蛇に仰せられた。「…わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」…また、人に仰せられた。「…あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」…人は、その妻の名をエバと呼んだ。それは、彼女がすべて生きていたものの母であったからである。神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった…神である主は、人をエデンの園から追い出された…創世記1-3。

エデンの園に置かれた人類の祖アダムとエバが蛇の誘惑に陥り、神の御命令に反逆したことにより、罪に支配される人生を歩まざるを得なくなったこと、そのため、罪の体のままで永遠に生きることがないよう、「いのちの木」が生えていたエデンの園から追い出されたことは、よく知られている創世記3章までの話の概略です。しかし、その後4章から、創世記の話がカインの殺人、ノアの時代の人類の暴虐と墮落、世界規模の大洪水の話へと進むにつれ、話に飛躍があるため物事の流れを追いくなくなり、どうせ神話だから筋が通らなくても仕方ないと、実話として理解することを諦めてしまっている方が多いのではないのでしょうか。おそらくクリスチャンでも、創世記11章までの有史前の出来事を真剣に理解しようとされる方は少ないのではないかと思います。

しかし、蛇の背後で人を罪に陥らせた黒幕、靈的被造物サタン（サタン）の動向に目を留めると、創世記の特に11章までの神話化されがちな話の筋が実によく見えてくるのです。今月号では、神の天地創造直後に起こったサタンの神への反逆の歩みを追うことによって、創世記3章までの出来事を考察することにしましょう。

エゼキエル書28章、イザヤ書14章の記述にしたがえば、サタンは、墮落前は、ルシファーと呼ばれる完全で、知恵に満ちた、美しい、御使いたちの長でした。しかし、天地創造の過程で地球が冷え固まり、宝石が地を彩り始めたある日、心が高ぶり、自分が「いとたかき方」のようになるとおごり、神に反逆し、罪を犯したために、神の御許、天界から追い出され、よみに落とされる分際になり下がったのでした。サタンとなったルシファーは天界の御使いの三分の一を引き連れて、地の周りを徘徊し、神のご計画を妨害し、破壊する者となります。

神が、先立って造られた御使いと違って、ご自分の家族の一員として体も人格もご自分に似せて「人」を特別に創造されたとき、サタンの目標は人に向けられました。神は、人に全地を支配する権威を与えられましたから、サタンは、人さえ自分の支配下に置いてしまえば、神の創造された天地を我が物にすることができると思

ったのです。かつてエデンの園にいたとき不成功に終わった野心を再び燃え立たせたサタンは、野の獣のうちで一番賢く、おそらく一番美しかった「蛇」に目をつけ、蛇を通して人に近づいたのです。人が誘惑に陥って、神の御命令にそむけば、人も自分と同じ神の反逆分子となり、サタンの王国を築きあげることができるのです。

神からの御命令を夫アダムから間接的に聞いていたエバがまずサタンの罠に落ち、神の掟に従って妻を正しく導くリーダーシップを与えられていたアダムも、エバが禁断の木の実を食べたのに死ななかつたことを見て安心したのか、簡単に罠に落ちて、神の御命令にそむいてしまったのです。神の創造の摂理への反逆の第一歩です。このようにして、サタンは、「人」を神から引き離すことに、まず、成功したのです。

夕方いつものように神がエデンの園を歩いてこられたとき、知恵の目が開け、善悪の判断ができるようになったアダムとエバは自らの罪の状態に気づき、自力で罪を覆い隠そうと近くにあった「いちじくの葉」を取り、神を避けて木の間に身を隠したのです。二人のとっさの行動は、罪のゆえに神から引き離され、罪悪感から逃れようと必死で方策に走る紛れもない「罪人」の姿でした。二人が最初の罪を犯した直後に、神がやさしく声をかけ、悔い改めのチャンスを与えてくださったにもかかわらず、アダムはエバとこともあろうに神ご自身に、また、エバは蛇に自分の罪を責任転嫁する行動に出て、罪から罪へと最初の人類は墮落の道を転がり始めたのです。

アダムとエバの墮落の背後に、黒幕の存在、最初に神に反逆し、罪を犯したサタンの陰謀があることを知っておられた神は、まず、サタンが利用した「蛇」に呪いをかけられました。それまで美しかった蛇は二人の眼前で一瞬のうちに、恐ろしく、醜い動物に成り果て、二人は神の発せられる権威ある言葉の威力にただおののかざるを得なかつたのです。続くは、サタンへの呪いの預言。神がサタンと女の間「敵意を置く」と預言されたことによって、全人類を支配下に置こうとのサタンのたくらみは、この瞬間、はっきりと挫折させられたのです。しかも、女の子孫から生まれる「メシヤ」（人を罪から解放する救い主）が、人に罪を入れた張本人、サタンの頭を踏み砕くという「メシヤ預言」は、神のご計画が、死すべきものとなった人への呪いではなく、憐れみであることを明確に告げたものでした。このように、人類史の最初の時点でサタンの究極的な滅びを宣告すると同時に、神は、ご自分が備えられるメシヤを通しての人類救済の道を明確に打ち明けられたのです。メシヤは、サタンに用いられる人々の手を通して、ついには十字架にかけられ死ぬこととなりますが、三日目に新しい「いのち」に甦ることによって、サタンを狼狽させるどんでん返しが起こるのです。すなわち、サタンはかろうじてメシヤの「かかとにかみつく」だけで、致命傷を受けて、滅びるのはサタンの方であることが宣告されたのです。

蛇、サタンにのろいが宣告され、地も呪いを受けることになったのに、アダムとエバには呪いをかけることはなさらなくて、メシヤを通しての「救い」の道を示してくださった神は、しかし、罪人としての人生が決してなまやさしいものではないことをやはり預言的に告げられたのです。アダムがエバを正しく諭すことができなかつたことによって、普遍的にリーダーシップを失った夫に対し妻は、「支配権」を渴望するようになり、他方で夫は、暴力的に「支配権」を奪還しようとする、この抗争、葛藤が、出産、育児の苦しみや家族を養うための勤労の苦しみに輪をかけて人生を困難に陥れ、挙句の果てには、人は罪の体の「死」を迎えることになるのです。

しかし、人の罪の体の死は、罪として人の体に支配権をもつようになったサタンから人を解放するための唯一の手段でもあつたのです。肉体の死がなければ、永遠に生きる甦りの体に与ることもできないわけで、メシヤによる救いを信じて、辛い人生を信仰を全うして死ぬということは、神の憐れみ導入の手段でもあつたのです。

神の預言の言葉を受け留め、神の備えてくださった救いの道を信じたアダムは、神からすでに自分と同じ「人」という名が与えられていた妻に、さらに「エバ」（人類の母）という普遍的な名（称号）をつけることによって、女からやがて「罪から解放していのちを与えるメシヤ」が生まれることを信仰表明したのです。アダムの信仰姿勢を受け入れられた神は、二人を贖い、ご自身が「皮の衣」を作って、与えてくださいました。神が与えてくださった皮の衣は、儀礼的に聖いと神が定められた動物のうちから欠陥のないものを犠牲としてささげる過程を経て、人の罪が赦されることのデモンストレーションの結果の覚えでした。罪のない生き物の犠牲の血による以外に、罪の贖いをするのができないことを、神自らが動物を殺して教えてくださったのです。罪人は「いちじくの葉」に象徴される、自分の義、考え、感情、能力、努力、宗教儀式、慈善の何をもってしても自らの罪を贖うことはできず、神が与えて下さる神ご自身の義による覆いである「義の衣」以外に、内住のサタンともいえる「罪」の存在を、取り除くことはおろか、包み隠すこともできないのです。

墮落後人には、肉体の死の後のいのちを望み見て内なる罪と日々戦っていく、信仰の歩みが始まったのです。